



僕が梅の花が好きになったのは、いつ頃からだっただしょう。

とりわけまだ寒い時期に咲きはじめた梅の花は、可憐さの中にも

ちょっとやさつとの雪や雨でも散ることはない力強さを秘めています。

それに、爽やかで芳しい香り。残念ながらあいにく花粉症の僕は、よっぽどコンディションが良くなければ、その香りを楽しむことはできないんですけどね。 (T_T)



東風吹かば 匂いおこせよ 梅の花
あるじなしとて 春な忘れそ



菅原道真が京を追われて、九州大宰府に出発するときに詠んだ歌といわれています。

道真公が大宰府の長官（大宰帥）の任に就いたのは旧暦の1月25日。今の暦に当てはめれば2月16日。

京を出立した時、ほころんでいた梅の花を見て詠んだのかもしれませんが。

道真公が、いわゆる「左遷」にあったのは57歳。平安時代の官僚の定年は70歳だったそうです。

今の我が国の会社の定年年齢は平安時代よりも低く、その多くが60歳です。

但し定年年齢が60歳の会社は、従業員が希望すれば65歳に達する迄、継続雇用する義務があります。（高年齢者雇用安定法第9条）結局、定年に到達した翌日からまた同じ職場で同じような仕事をしているということも多いのではないのでしょうか。



「定年って生前葬だな」

内館牧子さんのベストセラー小説「終わった人」（講談社）の、定年を迎えた主人公の独り言です。

リート社員だった主人公は、給料を下げられて軽易な仕事を行うという再雇用契約を拒否し、そのまま定年で退職することを選びました。

実際、法律で決まっているから仕方がない・・・と、いわば65歳までの雇用を義務的雇用と考えている会社も多いように思います。それではシニアの方は、働きがいを失ってしまいます。



東京商工リサーチの発表によると、昨年の倒産件数は10年連続減少したものの、

人手不足倒産は過去最多件数を更新し前年比22%も増えています。

倒産までには至らなくとも人手不足で苦しんでいる会社はさらにたくさんあるでしょう。

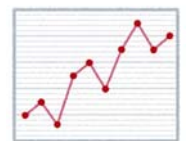
そもそも人口減になる位の急激な少子化で、企業の数に比べて若者の絶対数が足りなくなってきました。

60歳以降のシニアも貴重な戦力です。いつ応募がくるかわからない求人待ち続けるより、今いるシニアに働きがいを感してもらおうよう、会社の一員として積極的に役割を担ってもらってはいかがでしょう。

我が国の高齢化はさらに進みます。これからもぞくぞくとシニアになる人は続きます。

生き活きと働くシニアの姿は、続く40代、50代の社員の**モチベーション**につながっていきます。

身近なシニアの姿は、その会社における自分たちの未来だからです。



京都にある大徳寺・聚光院には狩野永徳の襖絵「梅花禽鳥図（四季花鳥図襖）」があります。

主人公は、のたうつようにくねる太い幹と真っ直ぐに伸びる凜とした枝を持つ梅の老木です。

可憐な花をつけた梅の木は、圧倒的な存在感を示しています。

梅は若木の頃、細い枝をどんどん上へ伸ばしていくのですが、永い年月の間 風雪に

さらされていくうちに複雑なシルエットを生み出し、威厳ある姿となるそうです。

若い梅の木だって、きっとそのうち憧れるに違いありません。 (^^) /



やっぱ
白わへんがな

アヴニール労務事務所

未来は変えられる! **avenir**